

平成29年2月17日(金)

老球の細道306号

平28年須賀川マイノリティクリニック終了

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「今は弱小チームだが基礎をしっかり育てて、将来世界に羽ばたくアスリートを育てる」。このような理念を持つチームが今年度須賀川に結集して開催された「須賀川マイノリティクリニック」全4回が昨日終了した。私はこのクリニックの講師を担当した。

このクリニックは須賀川ミニバスケットボール協会の鈴木夫妻と坂下ミニバスケットボールクラブの二瓶氏、鈴木氏の発案でスタートした。最初はミニバスケットボールチームが主体であったが、回を重ねるごとに地元の中学校や福島市の強豪中学校などが参加するようになり、毎回80名以上の子どもたちや指導者でにぎわうようになった。

最終回の第4回は「オフボールスクリーンプレイ」をテーマに2月11日(土)須賀川一中で実施された。今回は県体育協会の「福島夢アスリートプロジェクト事業」とコラボレートして行くことになった。この事業は「県内の全国トップレベルアスリートたちを世界で活躍できるアスリートに」という趣旨で作られたものである。福島県のバスケットボール関係ではトップエンデバーにノミネートされた福島西高校3年生の渡邊悠さんが指定されている。ちなみにコーチでは同じ福島西高校の渡邊拓也先生も指定されている。

そのようなこともあり今回のクリニックには福島西高校の渡邊選手と3年生3名、そして来年度福島西高校に進学の決定した県内各地の中学3年生も参加してくれた。主に私が全体指導をして、福島西高校の選手たちはデモンストレーションと子どもたちの指導に頑張ってくれた。おかげさまで、あっという間に3時間が終わった。このクリニックに参加しているチームは全てきちんとコーチングされているチームなので、選手の意気込みや表情がすばらしい。指導者も自らコートに立って叱咤激励してくれるのでなおさらだった。

しかし、いつも反省することであるが、準備したレジメを最後まで終了することができず今回も尻切れトンボになってしまった。選手とコーチの情熱に動かされて細かにやりすぎた結果である。受講者は結末がわからないまま終わってしまった映画を見せられたような気分だったろう。高邁な理想を抱いても、子どもたちにとって「オーバーコーチング」になってしまっただけでは「ムカデの脚」の寓話(普段は無意識にたくさんの脚を動かしながらスムーズに歩くムカデに、どの足を先に出して歩いているのかを考えさせたらムカデは途端に歩けなくなってしまったという話)になってしまう。目指すは「K I S (キス)！」。Keep is simple。簡単に。

クリニックにおいて目標にしていることがある。今まで無意識にプレイしていたスキルや戦術に原理原則を見出し、それらを理解しやすく整理して「わかる」と「できる」が両立できるように段階的、系統的に指導する。そこに「世界で通用する」というコンセプトが加わるために、最近の世界のトレンドとなっているスキルや戦術プレイを探す。そのためにNBAのゲームを見たり、インターネットの動画などを参考にしてそれらの指導法を日々考えるのは至福の時間である。

最後に、3年間にわたって、名もない、実績もない、お金もない私のような老コーチに色々なクリニックの機会を設定してくれた須賀川バスケットボール協会の鈴木利弘夫妻には感謝したい。勉強不足であることに気づかせていただき、まだまだ老いないでいられる。